

読んでみたい この一冊

大阪産業経済リサーチセンター
主任研究員 松下 隆



イラストで見る 『昭和の消えた仕事図鑑』

●文=澤宮優、イラスト=平野恵理子 原書房 2,376円(税込み)

店でふと手に取るなり引き込まれた本書。昭和という時代に生まれ、生きてきた懐かしさ?を感じたのでしょうか。最近IoT技術、AI(人工知能)、デジタル化というイノベーションに関連する用語が巷に溢れています。急速にイノベーションが展開しつつある現代において、機械に代替されない仕事とはどんなものか?という問いかけに、「昭和の消えた仕事」というタイトルをみて、答えが見つけれられるのではと考えました。

昭和の時代に消えた仕事をまとめた本書ですが、製造・小売店での仕事について現代から考察すると興味深い見方ができました。私は、本書に掲載されている仕事を3つに分類してみました。

1.「本当に消えた仕事」、2.「消えそうだが着実に続いている仕事」、3.「消えるどころか逆に脚光を浴びている仕事」です。

例えば、1.「消えた仕事」では、「文選工」が該当します。30年くらい前までは印刷物を制作するには、金属の活字を組み合わせて、構成した書面を割り付けする仕事が必要でした。しかし、パソコン等の画面で活字校正を行えるシステム(DTP技術:「デスクトップパブリッシング」)、ついでパソコンで文書が作成、校正、印刷できるシステムが開発され、金属の活字が代替されたことで、まさに文選工の職域は消えてしまいました。他には、「豆腐売り」、「荒物屋」などが挙げられます。

2.「消えそうだが着実に続いている仕事」として、各家庭常備薬を置き、使った分だけ清算する配置薬販売制度や「用いることを先にし、利益は後から」といったビジネスモデルを作り上げた「富山の薬売り」が挙げられます。一般社団法人全国配置薬協会は、この配置薬販売制度を現代版に改良して、広げることで保険制度設計に役立てようとしています。また、倒産したと泣きながらペンや雑貨等を露店で販売する「泣きばい」も該

当するでしょう。今でも大阪の街を歩いていると「勤めていた工場が倒産したので」といったチラシを張った露天商をみかけますね。また、ホームセンターに取って代わられた「よろず屋」ですが、地域の大工や工務店等を相手に専門性を高めて生き残ったところがみられます。また、「畳屋」も私の地元大阪府泉州地域あたりでは、街に数店残っています。

3.「消えるどころか脚光を浴びている仕事」としては、日本の伝統的なものが多く、例えば藍染での染に魅了され、「藍染め職人」を目指す人が増加しています。また、近年インバウンド客が本物の刀打ちを見学するツアーが開かれ、「鍛冶屋」は注目され工場見学を積極的に実施し始めています。

このように、昭和の時代に受け継がれた仕事を改めて分析することで、創業などのビジネスの芽や新たなサービスなどの視点が見えてきます。昔のままでは価値が限定的だったのが、現代風にアレンジするだけで価値が飛躍的に高まるのです。こうした気づきを本書からイラストを通じて直感的に感じられます。「イラストで見る」というサブタイトルが示すように、イラスト作家の優しい線画が昭和の懐かしさを細やかに映し出していることも必読です。

昭和時代を生きてきた方、何か古くて新しい仕事を探している方、日本らしい仕事を探している方、この一冊がビジネスのヒントになるはずです。

【著者略歴】

澤宮 優(1964年~)は、熊本県八代市出身のノンフィクション作家、エッセイストです。有名ではないが、輝きながら懸命に生きる人物を題材に、野球から歴史、文学、映画、教育まで幅広く執筆されています。